

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS

No. 131 November 2012



新学術領域研究

◆ 新学術領域研究総括シンポジウムの予告 ◆

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」は今年度で終了します。そこで、これまでの成果を総括し、このような研究の今後の可能性について議論するために、総括シンポジウム「ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像」を開催します。科研費の成果をできるだけ多くの方々に分かりやすく説明することを念頭に置いて、この総括シンポジウムは東京圏で開催することになりました。幸いにも、早稲田大学現代中国研究所が共催となってくださり、早稲田大学国際会議場井深大記念ホールという立派な会場でおこなう運びとなりました。

プログラムは3部構成となっています。午前の若手セッションでは、本領域研究にプロジェクト研究員として参加した若手の研究者の方々が、研究成果を披露します。午後のセッションでは、本領域研究において6つ設けられた計画研究から1人ずつが報告します。以上の9つの報告を通じて、本研究が新しい学術領域を開拓したことを示したいと考えています。最後の総括討論「ユーラシア地域大国比較の成果と可能性」では、各計画研究の代表者をパネリストとして、討論をおこないます。司会は早稲田大学現代中国研究所の天児慧所長、討論者として国立民族学博物館の小長谷有紀教授をお迎えします。多くの皆様のご参加をお待ちしております。[田畑]

新学術領域研究総括シンポジウム

ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像

日時：2013年1月26日（土） 9:30～18:45

場所：早稲田大学国際会議場 井深大記念ホール（東京都新宿区西早稲田1-6-1 18号館総合学術情報センター内 http://www.wispij.com/pdf/map_ibuka3.pdf）

共催：早稲田大学現代中国研究所 後援：地域研究コンソーシアム

9:30 開会

9:40-12:00 若手研究者による報告

司会：小松久恵（北海道大学）

1.

報告者：前田しほ（北海道大学）「ロシア・中国の記念碑に見るジェンダー構造」

討論者：高山陽子（亜細亜大学）

2.

報告者：任哲（アジア経済研究所）、三輪博樹（北海道大学）

「出稼ぎ労働者の中印比較：移動の自由、労働組合とガバナンス」

星野真（北海道大学）「ロシア・中国・インドにおける地域経済格差」

討論者：梶谷懐（神戸大学）

13:30-17:15 各計画研究による報告

1.

司会：松里公孝（北海道大学）

第1班：伊藤融（防衛大学）

「冷戦後インドの対大国外交：『戦略的パートナーシップ』関係の比較考察」

第2班：田原史起（東京大学）、松里公孝（北海道大学）

「地方ガバナンスの中・印・露比較：公・共・私の交錯」

第3班：金野雄五（みずほ総研）、丸川知雄（東京大学）

「ロシア・中国・インドの対外開放の政策と結果」

2.

司会：長縄宣博（北海道大学）

第4班：山室信一（京都大学）「国民帝国の形成と空間学知」

第5班：山口昭彦（聖心女子大学）

「周縁から見る『イラン』の輪郭形成と越境：一クルド系名家の軌跡から」

第6班：杉本良男（国立民族学博物館）

「周縁からの統合イデオロギー：マダム・ブラヴァツキーとインド・ナショナリズム」

17:30-18:45 総括討論「ユーラシア地域大国比較の成果と可能性」

司会：天兒慧（早稲田大学）

パネリスト：各計画研究代表者

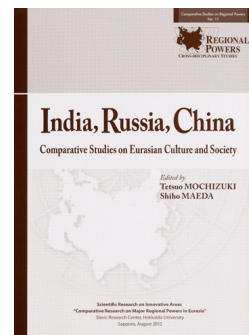
田畑伸一郎（北海道大学）、岩下明裕（北海道大学）、唐亮（早稲田大学）、上垣彰（西南学院大学）、宇山智彦（北海道大学）、山根聡（大阪大学）、望月哲男（北海道大学）

討論者：小長谷有紀（国立民族学博物館）

〔編集部注：このシンポジウムは、スラブ研究センターの今年度の冬期シンポジウムを兼ねて開催されます。〕

◆ 『比較地域大国論集』 第11号刊行 ◆

非定期刊行物である『比較地域大国論集』から、第11号が発行されました。望月哲男・前田しほ編 *India, Russia, China: Comparative Studies on Eurasian Culture and Society* は、第6班「文化」班が2011年9月15日～16日にバンガロール文化社会研究センター（インド、バンガロール）でおこなった国際シンポジウム“Comparative Aspects on Culture and Religion: India, Russia, China”の報告の中から、12本の論文をまとめたものです。このシンポジウムには、インドと日本だけでなく、イギリス、ドイツ、アメリカの研究者が参加し、国際色豊かなものとなりました。会場では白熱した議論が交わされ、論集にはその成果が反映されています。社会的役割、アートとナショナル・アイデンティティ、相互の文化理解・相互作用、大衆文化におけるアイデンティティの問題、また普遍的とされる問題への「アジア」的視座からのアプローチ（知的所有権、ジェンダー）といった多岐



にわたる切り口で、近現代のインド、中国、ロシアの文化的アイデンティティの諸相に迫ります。収録内容は新学術領域ウェブサイトの出版のページからダウンロードできます。[前田]

研究の最前線

◆ シレジンスカーアダムチャクさんの滞在 ◆

国際交流基金フェローとして、ポーランドのアダム・ミツキェビッチ大学研究員のシレジンスカーアダムチャク、アンナ (Sledzinska-Adamczak, Anna) さんが2012年9月3日～2013年2月28日(約6ヵ月)の予定で滞在中です。滞在中の研究テーマは「アジア・太平洋地域の国際関係を背景とした日露関係」です。[岩下]

◆ 専任セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2012年7月27日：宇山智彦 ①「総論〈東〉と〈西〉：特にロシアと東方との関係について」塩川伸明、小松久男、沼野充義、宇山智彦編『ユーラシア世界1〈東〉と〈西〉』東京大学出版会、2012年 ②“Introduction: Asiatic Russia as a Space for Asymmetric Interaction,” in Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London, Routledge, 2012) ③「ロシア帝国論」ロシア史研究会編『ロシア史研究案内』彩流社、2012年
コメンテータ：長縄宣博(センター)

今回の専任セミナーの報告論文と討論者を見て、「おや」と思われた方も少なくないのではないのでしょうか。これまでの専任セミナーは基本的には「過去一年以内に執筆した研究論文一編、センター外の専門家による討論者」というスタイルでしたが、今回は論文が三つ並び、討論者もセンター内の長縄氏でした。これは今年度から専任セミナーのルールを少し緩和し、概説を含む複数の関連する論文でも可であり、討論者についても、最もふさわしい専門家がセンター内にいる場合は、センター外という枠にこだわらなくてもよいとしたためです。

今回の宇山セミナーはこの新方式による第一回目の研究会でした。三つの論文はいずれも研究史や研究動向などを扱った概論的な性格をもつものです。言い換えれば、宇山氏の研究方法論や問題関心に密接に関わるものでした。具体的には、長縄氏の整理によれば、ロシア研究と東洋学、帝国論、環境・生態、ロシア史における専制権力論、身分制論、革命・内戦史、あるいは文化研究と歴史研究など、宇山氏がこれまでおこなってきた幅広い研究テーマを、ある意味で総括したのがこの三編だったといえるのかもしれません。

新方式による第一回の専任セミナーは、ルールとしては緩和されたものですが、中身としては従来方式よりもハードルが高くなったのではという声も聞かれました。

◆ 研究会活動 ◆

ニュース130号以降、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。ただし、今号で特に紹介したものは省略します。[大須賀]

8月25日 寺尾萌(首都大学東京・院)「現代モンゴルにおける民族音楽研究の現状と課題：生成／消滅の語りと『創作歌謡』の位置づけをめぐる」(北海道中央ユーラシア研究会)

- 9月7日 高田映介（京都大・院）「チェーホフ『谷間』の歴史社会的背景をめぐって」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）
- 9月18日 基盤研究（B）「近代ロシア・プラトニズムの総合的研究」研究会 堀越しげ子（札幌大・北大・非）「プーシキンとプラトン：20世紀の研究より」；下里俊行（上越教育大）「論戦するロシア神学者：20世紀初頭のロシア正教弁証論の問題意識」；北見諭（神戸市外国語大）「ベルジャーエフにおけるプラトニズムとアンチプラトニズム」
- 9月28日 野町素己（センター）「岐路に立つマイノリティ：多言語社会を生きるバナト・ブルガリア人とその言葉」（センター公開講演会）
- 10月8日 S. シフツェフ＝ドゥル（国営サハ・フィルム、ロシア）、P. シフツェフ＝マクシーモフ（北東連邦大、ロシア）「永久凍土の国、東シベリア、サハ共和国の民族映画制作と伝承文学」（北海道スラブ研究会）
- 10月16日 J. クズミコヴァ（スロヴァキア文学研究所）「スロヴァキアの戦争文学に描かれるロシア人の特徴」（比較大国論セミナー）
- 10月27日 王中忱（清華大、台湾）「間宮林蔵は北の大地で何を見たのか：清朝期の東北地域における民族移動と多民族的混交」；ナヒヤ（武蔵大・和光大）「蒙民厚生会の設立とその文化・教育支援事業」（SRC 新学術セミナー）
- 10月29日 野部公一（専修大）「旧ソ連諸国における農業構造および農業生産の変容の比較分析：カザフスタンを主な事例として」（客員研究員セミナー）

人事の動き

◆ 福田宏氏の転出と木山克彦氏の助教採用 ◆

新学術領域研究やグローバル COE をはじめとするセンターの活動を支えてきた福田宏助教が、2012 年 10 月 1 日付けで、京都大学地域研究統合情報センターに助教として転出しました。ますますのご活躍をお祈りしています。

同日付けで、木山克彦氏が助教として採用されました。木山氏は 2008 年 3 月からセンターの非常勤研究員（センターニュース 2008 年春号参照）、2009 年 4 月から北海道大学埋蔵文化財調査室研究員、同年 11 月からセンターの博士研究員（GCOE 経費）を務めていました。主に GCOE 関連の博物館展示を担当します。[宇山]

シカゴ大学に滞在して

野町素己（センター）

1. なぜシカゴ大学にしたか

2012 年 3 月末から 9 月中旬まで、センター関係者皆様のご理解とご支援をいただき、米国シカゴ大学の東欧・ロシア・ユーラシア研究センター（CEERES）にて在外研究をする機会を得た。留学先が米国である義務は恐らくなかったので、自分のフィールドである東欧で現地調査にどっぷり浸かるのも魅力的だった。しかし、スラヴ語研究の歴史も伝統も、現地よりも浅いとはいえ、研究環境が現地よりも遥かに整い、優れた研究者を多数輩出する米国には昔から強い関心があった。恩師の一人である N 先生が常日頃「私がアメリカにいた頃はね

…」、「私がいたハーヴァード大学ではね…」と、ときに満足そうに、またあるときは現地しか知らない学生を残念がるような調子でおっしゃっていたのが刷り込まれていたというのもあるだろうし、分野は違うといえ、米国各地で大学教員をする親戚3人からの影響も多分にあるだろう。

米国の数ある大学の中からシカゴ大学に決めたのは、上記センター長を務めるヴィクター・フリードマン教授が、受け入れを以前に提案して下さったからだ。フリードマン氏は、バルカン言語学、スラヴ語学、コーカサス言語学を専門とし、私に取り組んでいるテーマであるスラヴ世界の言語接触と言語変化の諸問題についての世界的な権威の一人である。シカゴ大学のスラヴ語研究は、60年代以降エドワード・スタンキューヴィッチやズビグニェフ・ゴウォンプといった学者が世界のトップレベルに引き上げ、現在も有能なスタッフが多数在籍する。そして一般言語学でも素晴らしい伝統がある。かつてサビアやブルームフィールドが教鞭をとり、現在もマイケル・シルヴァスティン、サリココ・ムフウェネといった大物を擁しており、そういった大学の雰囲気そのものに興味があった。また、親しくする米国のスラヴ学者の何人かは、同じように親切に受け入れを提案されたが、その多くが「自分の大学以外ではシカゴがいい」と言っていたのも後押しにもなった。

2. 大学での研究生生活

私が滞在したのは International House というシカゴ大学のキャンパスにある外国人や学生向け宿舎である。ロケーション以外にあまり取り柄はないと思われるが、大学だけに用事がある場合には十分快適だ。

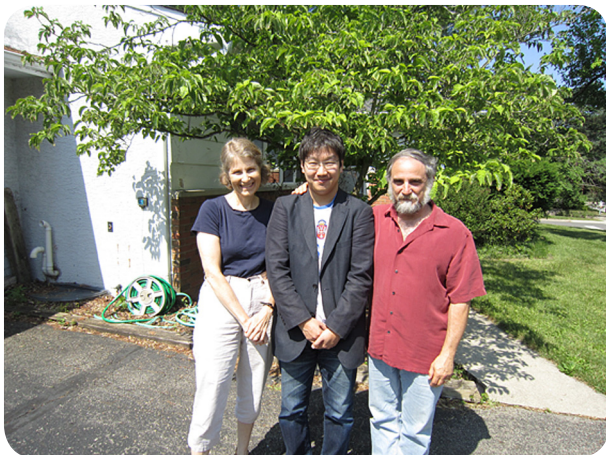
この在外研究期間中にしたいことは、主に3点であった。そのうちシカゴ大学でしたいことは2点で、フリードマン氏の下で、主に西スラヴ諸語、南スラヴ諸語の言語接触の問題について研究を進めることであり、もうひとつは大学の講義に出席して、その様子を見ることであった。

まず後者に関して、「今さら大学の授業に出るなんて」と思う方もいることだろう。しかし私も大学教員の端くれであり、しかもまだ経験は浅い。そして単純に米国のトップレベルの大学において、どのような内容の講義が、いかなるレベルで行われているのか、また教員はどのような指導をしているのか、興味があったのである。シカゴ大学は4学期制で、私が聴講したのは3月末～6月の最終学期であった。聴講したのは4科目、「スラヴ諸語通時研究」(ヤロスラフ・ゴルバチョフ助教授)、「イディッシュ語文法論」(ジェリー・セイドック教授)、「社会言語学」(ウン・ロイネラント教授)、「言語政策・言語計画論」(同)である。フリードマン氏やシルヴァスティン氏などの講義も聴講したかったが、私がいた学期にはあいにく開講されていなかった。

どの講義も魅力的なものだったが、特に印象に残ったのは、同世代のゴルバチョフ助教授のスラヴ諸語通時研究の講義であった。歴史言語学の多様な理論に精通し、実際の言語資料に関する膨大な知識を有し、難解なアクセント論なども軽々と論じてしまう。聴講していた



左から：ゴルバチョフ氏、筆者、フリードマン氏



ブライアン・ジョセフ氏夫妻と

学生たちも彼の説明をよく理解していたようで、こういった授業が私にも出来ないものかとため息が漏れる。なお、1科目につき講義は週2回あり、かつ大量の課題が出され、講義ではそれを踏まえた討論や報告も求められる。私は自身自身の研究も別にあるので、4科目だけでも十分大変だった。いずれの科目でも教員は基礎的な内容からきちんと教え、課題としてかなり専門的な論文を多く読ませるなど、その達成目標が非常に高い。

そのような充実した教員と講義に加え、設備も申し分ない。中でもレーゲンスタイン総合図書館は特筆に値する。蟹気楼でもないと思えないくらい豊富な蔵書を有し、スラヴ関係のコレクションも実に見事である。借り出し冊数は無制限、図書館サイトから研究論文が自由にダウンロードでき、また図書館にない資料は、現物取り寄せやスキャンで迅速に手配してもらえる。図書館は午前1時まで開館しているなど、研究のサポート体制は整備されている。

さらに通常の講義に加え、言語学の様々の分野のワークショップがかなりの頻度で行われており、それらは通年プログラムとなっている。世界中から集まった学者が報告を行い、議論は常に白熱するようだ。こういったプログラムを消化するのは大変であるが、学問的に極めて多くの刺激を受けられる環境である。それもあってか、時々目の覚めるような秀才学生もいたが、このように恵まれた環境を活かせるのであれば、恐らく当然の結果なのだとも思う。

フリードマン氏は、私を自宅に何度も招待してくださり、私の研究の進捗状況を熱心に聞き、執筆中の論文などにも様々な助言をして下さった。また言語学科のティータイムやセミナーにも同行され、様々な研究者と知り合う機会を作って下さった。シカゴ大学で知り合った研究者はどなたも大変親切で、施設などの物質的な環境だけではなく、人的環境にもかなり恵まれていたと思う。CEERES 副センター長のメレディス・クレイソン氏は、すべてのペーパーワークを迅速にしてくださっただけでなく、様々なケアを想定してくれていたようだ。例えば、私がホームシックにならないように日本人コミュニティと相談して準備しているなど、日本でも珍しいくらいの心遣いである。

大学に慣れてきた5月頃からは、自分のこれまでの研究を少しまとめ、月末にスラヴ語・文学科にて私のセミナーが開催された。カシュブ語統語論の言語接触に基づく特殊性を論じたが、思いの外出席者が多く、たくさんコメントを頂いた。ボジェナ・シャルクロス氏などの著名な文学研究者も参加し、活発に議論が展開されたのが印象的であった。

学期中はキャンパス外に出ることはほとんどなかったが、6月にはブライアン・ジョセフ氏に招待され、オハイオ州立大で研究報告を行った。こちらでは手厳しい批判も受けたが、それらはどれも建設的なものであった。ジョセフ氏は自宅に泊めて下さり、コロンバス周辺の観光案内もしてくださった。「言語学コース」と称して、ブルームフィールドが住んでいた家、ケンネス・ネイラーが住んでいた家なども案内して下さい。フリードマン氏もそうなのだが、彼らのような超一流研究者は、大変な多忙にもかかわらずこういった時間を確保し、しかも大変楽しんでおられるように見えるので、いつも不思議に思う。余談だがジョセフ氏との会話の中で、彼が私の論文を査読していることがわかり、途中からお説教も加わったが、それもまた良い思い出となった。

3. 移民の言葉

「したいことは3点あった」と上に書いたが、残りの1点はスラヴ移民の言葉に触れることであった。これは言語接触の観点からも実に興味深い。そしてシカゴにはとにかくスラヴ人が多い。上記N先生のエッセイで、シカゴのポーランド人街に行き、ポーランド語で「もちろん」と言ったら驚かれたといったエピソードが思い出される。あるときシカゴ美術館の前の喫茶店で座っていたら、後ろの席からポーランド語が聞こえてきた。ポーランド人の親子連れだ。幼い子供がニコニコしてこちらを見るので、ポーランド語で「やあ、何してるの?」と話しかけると、その子は急に不審そうな顔になり「お母さん、どうしてこの人はポーランド語を話すの?」と聞いていた。ポーランド語は恐らく両親や家族の言葉で、家族以外は英語なのだろう。我々はポーランド語でしばし歓談し、彼らは「よいシカゴの滞在を!」と言って去っていったが、その後同じ席から聞こえてきたのはロシア語だった。また次のようなこともあった。大学の近くの床屋での話だ。床屋が私の髪の毛を切っているとき、私や他の同僚とは英語で話しているが、そのご主人と思われる方との会話では、急にクロアチア語になった。私は思わず「あなたはクロアチア人ですか」と聞いたら、「あなたこそどうしてクロアチア語を知ってるのですか」と逆に驚いて聞き返された。こういったエピソードには事欠かない。

この「移民の言葉」に関し、今回の米国滞在を利用し、せめて「調査の下見」程度しておきたいと思っていたのは、カナダ・オンタリオ州のヴィルノというカシュブ人集落である。19世紀半ばに、彼らの先祖は「パンの一片を求めて」、主にカシュブ中部から北米に移住した。ヴィルノはトロントからバスで片道6時間、バスは週3便しかない。仮に現地に行っても、土地の人の助けが無い限り何も出来ない。そして誰も知り合いはいない。先方の関係者に連絡しても、返事がもらえないので諦めかけていたが、ポーランドのカシュブ人とトロントのセルビア人の友人の助けを借りて、なんとか現地を案内してくれる人を見つけた。ディヴィッド・シュリスト氏という移民5世のカシュブ人である。彼は現在ヴィルノ町長で、近年はカナダのカシュブ文化の復興運動を積極的に行っている。私が滞在したときはあいにく夏休みで留守にしている人が多かったが、それでもシュリスト氏のお陰で、カシュブ語をよく知る60代から100才の方々数人に話を聞くことができた。特に高齢の方々(80才以上)の言葉は、19世紀末から20世紀初頭にかけてカシュブ全域で方言調査を行ったフリードリヒ・ロレンツの記述通りだったため、その記述の正確さに改めて驚きを感じた。ヴィルノはカナダの大都市から比較的離れていて、彼らは生まれてから町を出ていないため、予想以上に言語変化のスピードが遅く、彼らの言葉には英語の要素が入り込まなかったのだろう。私がつたないカシュブ語で話しかけると(といっても異なる方言だが)、それに驚くこともなく、カシュブ語でご両親のことや子供時代のことを懐かしそうに話されたのが印象的であった。

現地のカシュブ人のうち、若い世代は、もうカシュブ語を話さず理解も出来ない。中年以上の多くの人は理解するが、会話には困難を感じるという様子である。60代から70代では、



ヴィルノのカシュブ博物館

よくカシュブ語を話せる人でも、語彙に英語の要素がかなり浸透していた。また私が知るカシュブ語の語彙で、彼らの日常に無い概念のものは通じない。例えば、彼らの語彙に「日本」や「言語学者」は無いため、だいたい「彼は Japan からきた linguist だ」と英語交じりになるし、私が「研究のために現地調査を行っている」と本土のカシュブ語で言っても全く理解されない。そして、「このカシュブ語ではどのように言いますか」と聞いても「わからない」となるわけである。

彼らからよく聞いたのは「子供の時の会話はすべてカシュブ語だった。しかし家族が都市に出ていってから、また両親が他界してからカシュブ語はあまり話さなくなった」、「自分が子供の頃、英語を知らなかったので学校で大変苦労した。自分の子供には同じ苦労をさせたくなかったので、カシュブ語は一切話さなかった。後悔している」というエピソードである。昨年はポーランド本国からカシュブ語講師を招聘して、1年間カシュブ語のコースを組織したとのことである。カナダのカシュブ語の前途は明るいとは言えないが、シュリスト氏の活動を中心に、本土のカシュブ人とも連携し、復興への道が開けることに期待したいし、私も近い将来今回の訪問についてまとめ、また再調査の計画も立てたいと考えている。

4. 帰国して

9月半ばに帰国してから、溜りに溜まっていた用事を片付け始めなければならず、さらに月末には新しく始まった「スラブ研究センター公開講演会」があったので、その準備にすぐに取り掛かった。10月からは授業も始まり、さらに秋の学会や科研費申請シーズンで、シカゴ滞在の余韻に浸る暇はあまりない。帰国後は CEERES のアソシエート・メンバーに任命されたので、これからもシカゴ大学には縁があるだろうし、可能ならば共同のイベントなども組織してみたいものである。

今回のシカゴ滞在に関して、センターの M 研究員が特にご支援して下さいたと認識している。M 先生は 30 代後半になって初めて海外留学をされたと聞いた。私は学生の時に東欧に 2 回長期で留学する機会があり、M 先生の初めての留学を迎える年齢を前にして、3 度も留学しているのは、まさに「恵まれすぎ」であろう。わずか半年と言えそうだが、それでも米国滞在を通じて身を持って知ったレベルの高さ、そして新たに出てきた研究課題、また次の世代に伝えるべき経験もたくさんある。スラブ研究センター、シカゴ大学の関係者の有形無形のご支援・ご理解に改めて感謝し、今後の研究・教育活動に可能な限り還元し、様々な形でスラブ語研究の発展に尽くしたいと思う。

4th East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies に参加しての所感

本田晃子（センター）

国際学会というと、イギリスの作家で英文学の教授でもあるデイヴィッド・ロッジの小説、『小さな世界』（*Small World*, 1984）を思い出す。読んだのはもう 10 年以上前になるだろうか。同書によって、国際学会とは中世の巡礼の旅に比すべきものであり、贖罪の行為（ペーパー提出、研究発表）を果たしながらも、旅のあらゆる楽しみに耽ることができ、ついでの謎の学会狂の美女とも知り合えるものと教えられ、以来恐れだか憧れだかよく分からないものを抱き続けてきた。そんな私にとって、今回のインドのコルカタに於ける 4th East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies は、そのような国際学会に生まれて初めて参加する機会となった。ここでは私の主観的な感想などを、あまり脈絡もなく書き連ねさせていた

だきたいと思う。ちなみに先に結論を述べるならば、謎の美女（美青年）との出会いはなかった（学会の日程やパネル構成についてはここを参照：http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/text/Panels_Sepconf.pdf）。

アブストラクト提出

まずはアブストラクトの作成に関してだが、今回は実にたくさんの反省点が残った。

というのも、前年度中は博論にかなり切りだったこともあり、その反動で、今回の報告ではとりあえず何

か新しいテーマで発表したいという衝動のままにアブストラクトを作ってしまう、当然ながらアブストラクト提出後数ヶ月かけてペーパーの内容を煮詰めていくうちに、アブストラクトとペーパーとの間には埋めることのできない溝が。そもそもタイトルからして致命的に内容から乖離しているという体たらくになってしまった。

結局、タイトルもアブストラクトも、ペーパー提出と同時に変更させてはいただけないかと、主催側の MAKAIAS (Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies) の Suchandana 教授に恐る恐るメールで問い合わせることに。教授は快く変更を許してくださったが、もっと大規模かつシステムティックな学会ではこうはいかないかもしれない。ちなみにこのようなイレギュラーなやりとりを含め、報告当日までの事務連絡は全体的にとってもスムーズで、問い合わせ等にも非常に迅速に対応していただいた。

ペーパー作成とプレゼンテーションの練習

前回の北京大会では、ロシア語報告者も相当数いたと聞いたが、私の場合は英語での雑誌投稿を前提に、ペーパーもアブストラクト同様英語で準備した。ペーパー自体は、夏のスラ研合宿で報告した内容を翻訳する形だったので、比較的スムーズに完成できたように思う（もっとも、最終校正を押しつけた J さんには、違う意見があるかもしれない）。

修士時代より、私は 20 世紀前半に生じた建築のマスメディア化、すなわちマスメディア上を流通しはじめた建築イメージが、実際の建築空間以上に社会的な影響力を有していく過程に注目してきた。そのような観点から、今回の報告では長らく論じたいと考えていた「映画の中の建築」というテーマを取りあげることにした。具体的な分析対象としたのは、スターリン期を代表する映画監督、グリゴリー・アレクサンドロフのミュージカル・コメディ作品『輝ける道』で、そこに登場する虚実混淆の建築空間を、ソヴィエト建築論と映画論を総合しつつ論じることを試みた。要は、実在する農業博覧会（現在は全ロシア展覧会センターと呼ばれている）の空間に、実現されることのなかったソヴィエト宮殿のイメージを接合したどうにも異様なシーンがあって、これを論じずにはいられなかったのである。1930 年代後半～50 年代に建設された多くのモニュメンタルな建築には、イデオロギーを大衆に向けて分かりやすく伝達する、“物語る建築”であることが要請されたわけだが、今回の報告は、建築それ自体よりも映画という物語を介してこそ、建築に求められていたコミュニケーション機能を浮き彫りにできるのではないか、という私自身の仮説の論証を目指すものとなった。



プレゼンテーション

ただしペーパーの作成では、ソヴィエト映画史・映画論に関する専門家の参加はおそらく少数、ソヴィエト建築に関してはゼロだろうという予測の下、抽象的な議論や既存の建築論・映画論への言及は最小限に留めることにした。予備知識を必要とする議論よりも、いくつかのショットを抜き出してそれを具体的に分析するという、分かり易さを前面に押し出すことを心がけた。

ペーパーを書き上げたあとは、ネイティヴ・スピーカーを交えて何度かプレゼンテーションの予行練習を行った。英語に関しては、日頃よりBBCのLittle BritainやTop Gear等の番組に親しんで意識的に鍛えているつもりなのだが、今日に至るまでなぜかアカデミックな場面や日常生活でも、一向に英語が上達したという実感がない。激しい質疑応答になれば、馬脚が現れてしまうのは明らか。けれども数ヶ月の準備期間は、英語力のプレゼン能力を向上させることよりも、むしろ悟り（諦め？）の境地に至るために費やされてしまった気がする。

またプレゼン訓練では、オーディエンスの理解の速度に合わせてゆっくり話すことを繰り返し指導され、25分を目処にペーパーを作成していたのだが、速度を落とすためにかなりの分量を削ることになった。さらに何らかの理由で突然発表時間が短縮された場合に備えて、スキップする場所もあらかじめ決めておいた。当日司会から言い渡された持ち時間は20分で、これはやっておいて良かった下準備だったようである。ただ、報告時間はやはりペーパーの募集時点で明記しておくべきではないかと思う。

報告パネルについて

私の報告はCulture and the Regionと題されたパネル（第12パネル）に組み込まれており、学会2日目（9月5日）の最後のパネル、学会全体としても最終パネルだった。基本的に映画・メディア論に関するテーマでまとめられており、驚いたことにディスカッサントとして招聘されていたのは、インドのドキュメンタリー映画を代表するGautam Ghosh監督。映像系パネルに映画監督を招くとは、なんだか心憎い演出である。

私以外の報告者からは、カザフの現代映画、中央アジアの芸術運動、キルギスのマスメディアにおける大統領選の報道動向を扱った報告等が行われたが、最終パネルと言うこともあり、オーディエンスの数は他のパネルに比較して多く、中規模の教室が7割方埋まっていたと記憶している。私自身の報告に関して言えば、残念ながらオーディエンスからのレスポンスは今ひとつだったように感じた。

欧米では、アレクサンドロフやプーリエフといったスターリン期のミュージカル映画に関しては、現在もジェンダー論やラカン派精神分析などの切り口から活発な議論が行われているが、ディスカッサントのGhosh監督によれば、ソ連期の社会主義リアリズム映画という分野自体、インドではあまりポピュラーな研究対象ではないとのこと。今回扱った『輝ける道』も、ソヴィエト映画研究の中では多くの先行研究のあるメジャーな作品なのだが、インドで同作品を見ることは（特にロシア語を解さない場合は）難しいとのことだった。また映像を用いた報告につきもののジレンマだが、ペーパーを読み上げる時間を確保するために、静止画のみで動画をほとんど用いなかったのも、オーディエンスの注意を誘導できなかった一因であるように思う。Ghosh監督ご自身はエイゼンシュテインなどソヴィエト・ロシアの映画作品・映画理論に興味を持たれているそうで、コメンタリーの中では私が報告内では端折ってしまったアレクサンドロフの制作環境や時代背景等の情報を補足していただいた他、改めてこの時代の映画作品を分析することの重要性を指摘していただいた。

パネル自体は、発表者が当日になって2人増えたこともあり、すべての報告が終わった時には予定時刻を1時間以上オーバーしていた。最後のパネルゆえにできた力業、と言うべきなのだろうか。ただそのような大幅なスケジュールの遅れによりほとんど質疑応答の時間は

なく、多少肩透かしを食らった感は否めない。また私の場合は20分という制限時間内になんとか収めたが、タイムマネジメントに関しては比較的ルーズで、司会者と報告者の親密度(?)によって、持ち時間を少々オーバーしても許容されるような雰囲気があった。

全体を振り返って

全体の組織・運営に関しては、小規模な学会ゆえに小回りが効くメリットと、それゆえに実際の中では個々人の言動が運営システムに優先されがちなデメリットの両面を強く感じた。また人文系のパネルに関しては、パネルあたりの報告者の数が多く、特に第9パネル Aspects of Eurasian Literature and Society では、各報告者が10分強の制限時間内に高速でペーパーを読み上げなければならなくなるなど、スケジューリングに疑問を感じる場面が多かった。国際的な報告の場を設けることは確かにそれだけで有意義であるのかも知れないが、報告の場自体の質を高めなければ、報告者のモチベーションを維持するのは難しいのではないかな。

私個人に関しては、もともと語学にも学会報告に苦手意識があったのだが、今回の経験で多少の度胸はついたような気がする。質疑応答をこなしていないので、多分に根拠のない自信なのだが。プレゼンのスタイルについては事前に様々な方面から助言をいただき、こちらは非常に実になる部分が多かった。ペーパーの校正やプレゼン訓練でお世話になった方々には、本当に感謝している。この場を借りて謝辞を捧げたい。

旅についての所感も少し。主催側に招待していただいたガンジス河クルーズは、とても印象的だった。インド＝自分探しのための場所、という固定観念があったのだが、実際にはインドという国の迫力を前にして、むしろロシア研究者としての私のアイデンティティーがガンジス河を漂流しそうになった。食事に関しては、元々インド料理は好物なので、実に至福の日々を送ることができた。コルカタ後そのままモスクワに移動してしばらく滞在していたのだが、スパイシーな料理への禁断症状に苦しめられることに。なお、松里先生からの貴重な情報によれば、インドで学会発表後にビールを痛飲したい場合は、空港の免税店で買って、宿泊先に持ち込むのが良いとのこと（できれば事前にメーリングリストで周知していただきたかった）。次のインド訪問の機会に活かしたいと思う。



ガンジスの夜景に乾杯

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

2012年11月3日 地域研究コンソーシアム年次集会、ならびに一般公開シンポジウム「地域研究と自然科学の共同：広域アジアの地域研究を例に」 於スラブ研究センター

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/2012.html#11>

11月4日 2012年度内陸アジア史学会大会 於北海道大学

<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/index.htm>

11月13-16日 BRIT XII大会 in 福岡・釜山

<http://www.borderstudies.jp/brit2012/top.html>

11 月 15-18 日 ASEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 年次大会 於ニューオーリンズ

<http://aseees.org/convention.html>

2013 年 1 月 26 日 新学術領域研究総括シンポジウム 於早稲田大学国際会議場

2015 年 8 月 3-8 日 ICCEES 第 9 回大会 於幕張 <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>

センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。
[大須賀]

図書室だより

◆ 『中国少数民族旧期刊行集成』の購入 ◆

本叢書は、1949 年以前の清末民初の中国において出版された、いわゆる少数民族関係の雑誌を収集、復刻したものです。収録された雑誌は、モンゴルをはじめ、チベット、ウイグル、満州、そして苗などの雲南・貴州省の諸民族にいたる、当時中華民国勢力下にあった漢民族以外の民族に関するもので、77 種に及び、その内容は政治、経済、宗教、軍事、教育、地理等多岐に亘っています。叢書全体は全 100 冊の構成となっていますが、北京、南京、広東、四川、新疆、内蒙古など、出版地別に 22 巻に分けられており、例えば北京巻は計 24 冊あり、『蔵文白話報』や『回文白話報』など、21 種の雑誌が収録されています。

言うまでもなく、これらの雑誌が発行されたのは中国の激動の時代であり、これらはその時代の様相をリアルに伝える資料として非常に価値の高いものだと思います。しかし、その時期の中国は、各地で戦闘が頻発するような時代状況であったことに加え、これらの資料の大部分は、発行部数が少なく、また発行期間も短かったのが事実です。そのため、散逸したもの、所在不明のものも多く、現時点での利用、特に通時的な参照は、事実上不可能に近い場合が多々あります。第一巻冒頭の「出版説明」において、出版者である中華書局の編集部は、本叢書所収の資料の検索・収集作業に非常な困難があったと述べていますが、それはそのまま、当該期を対象とする、現在の研究者の困難でもあると思われます。従ってこの点で、本叢書が近代の東アジア研究をはじめとする多様な分野に提供する便宜は、決して小さくないと言えるでしょう。

例えば、第 25 冊所収の『西陲宣化使公署月刊』は、1935 年 5 月に創刊され、1937 年 5 月まで発行された、「西陲宣化使」事務局の機関誌です。「西陲宣化使」は、民国政府が主にモンゴル地域の人心安定を図るため、チベット第二の活仏パンチェンラマの活用を意図して同ラマに与えた称号で、「公署」すなわちその事務局は、民国政府行政院の管轄下におかれしました。その活動については現在までほとんど知られておらず、同資料はその点で、その詳細を具体的にみることのできる貴重な価値を持つものであると言えます。

最後に、スラブ研究センターがこの春、本叢書を購入した際、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 4 班(帝国論)、およびグローバル COE「境界研究の拠点形成」の経費が使用されたことを付記いたします。[高本]

◆ 『農業と林業 Сельское хозяйство и лесоводство』の購入 ◆

センター図書室は、昨年度末、帝政ロシアの国有財産省が1865年に発刊した上記月刊誌の創刊から1913年までをカバーするマイクロフィッシュ、約2000枚を購入しました。（なお、同省はその後、1894年に農業・国有財産省に、1905年には土地整理・農業総局に改組されましたが、雑誌は同じタイトルで継続して発行されました。）

内容を見ると、技術的な内容とともに経営や行政、農業教育等の問題がとりあげられ、文献紹介や外国の農業事情紹介にも相当の紙幅を割いています。

誌面には、ロシア帝国各地の多様な環境のもとで営まれた、さまざまな作物や家畜に関する記事が掲載されており、当時の農林業の実態に関する基本的な資料として活用されることが期待されます。

センターが今回購入したセットは、現在、附属図書館において整理待ちの状況ですが、必要な場合は、利用できるように対応します。[兔内]

◆ サハリンの古地図画像の公開 ◆

図書室では、センターの所蔵するロシアの地図帳2点を中心に、所蔵する画像資料およびウラジオストクの極東国立歴史文書館の所蔵資料情報を、ウェブサイト (<http://srcmaterials-hokudai.jp/>) にて公開していますが(センターニュース118号、2009年8月参照)、この9月に、サハリン関係の若干の地図画像をこれに追加し、あわせてデザインをリニューアルすることができましたので、お知らせします。

追加された地図画像は、幕末に岡本監輔らが製作したサハリン全島図、日露戦争直後のコルサコフ（大泊）、および、シベリア内戦期に日本画保障占領していた時期のアレクサンドロフスクの市街図で、これらは画面上に表示させるだけでなく、データをダウンロードすることも可能です。

なお、このデジタル画像製作とウェブサイトへの組み込みにあたっては、本学メディア・コミュニケーション研究院のスヴェトラナ・バイチャゼさんが代表を務める科研費プロジェクト（基盤研究B）「北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割」（2011-2013年度）の支援をいただきました。関係者のみなさまにお礼申し上げます。[兔内]

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第60号への投稿は8月末で締め切られました。10件の応募があり、2013年春の発行を目指して現在審査をおこなっています。[長縄]

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

第32号は9月に刊行されました。第33号の投稿は締め切れ、現在審査をもとに採否を検討しているところです。また、第34号の投稿締め切りは2013年1月15日です。皆様の積極的な投稿をお待ちしています。[松里]

会 議 (2012 年 9 月)

◆ センター協議員会 ◆

2012 年度第 4 回 9 月 25 日

議題

1. 教員の人事について

2. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 130 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。

[宇山／大須賀]

8 月 22 日 Oookhnoi Batsaikhan（モンゴル科学アカデミー国際研究所）

8 月 25 日 寺尾萌（首都大学東京・院）

9 月 2 日 高田映介（京大・院）

9 月 13 日 Paul Wexler（テルアヴィヴ大、イスラエル）

9 月 18 日 下里俊行（上越教育大）、北見論（神戸市外国語大）

10 月 8 日 Stepan Sivtsev-Dollu（国営サハ・フィルム、ロシア）、Praskov'ia Sivtseva-Maksimova（北東連邦大、ロシア）

10 月 16 日 Jana Kuzmnikova（スロヴァキア文学研究所）

10 月 27 日 王中忱（清華大、台湾）、ナヒヤ（武蔵大・和光大）

11 月 1 日 宮崎淳史（東京外国語大学・院）

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は 8 月 6 日～9 月 22 日の間、新学術領域研究に関わる資料収集及び意見交換、また、大学間学術交流協定による交流拡大に関する打合せ（ブレイメン大学）及びヘルシンキオフィス関連活動、その他のため、ロシア、フィンランドに出張。

松里公孝研究員は 8 月 24 日～9 月 7 日の間、新学術領域研究第 2 班「エリート、ガバナンス、政治的亀裂、価値」に関する資料収集及び現地調査、また第 4 回東アジア学会参加のため、中国、インドに出張。

家田修研究員は 9 月 3～19 日の間、科学研究費研究に関する現地調査のため、ウクライナ、オーストリア、ハンガリーに出張。

岩下明裕研究員は 9 月 10～18 日の間、新学術領域研究第 1 班「国際秩序の再編」に関する ABS 会議にて研究報告、意見交換のため、ポルトガルに出張。

望月哲男研究員は 9 月 10～27 日の間、新学術領域研究第 6 班「地域大国の文化的求心力と遠心力」に関する国際ラウンドテーブル参加及び現地調査のため、アルメニアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は 9 月 10 日～10 月 1 日の間、科学研究費研究に関する講義及び資料調査のため、米国に出張。また、10 月 20～30 日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、米国に出張。

2012年10月21日 今年の観楓会は札幌郊外の滝野すずらん公園でバーベキュー

この日は札幌中心部よりかなり冷え込み、うっかり軽装で来てしまった人たちは、寒くて立ちっぱなしなほどでした。それだけに一足先に紅葉が見ごろになっていて、久しぶりに文字通りの“観楓会”となりました。



アシリベツの滝にて。
日本語学習中のW氏に、「滝という字は
サンズイと竜^{ドラゴン}の組み合わせなんだよ。と
得意げに教えるO。

向って左：ポーランドから来たばかりのAさん夫妻。子どもたちは運よく家から一番近い認可保育園に通えることになりました。右は帰国間際の特任教授W氏。



帰りぎわに全員集合（T氏撮影）。

目 次

新学術領域研究	1
新学術領域研究総括シンポジウムの予告／『比較地域大国論集』第11号刊行	
研究の最前線	3
シレジンスカーアダムチャクさんの滞在／専任セミナー／研究会活動	
人事の動き	4
福田宏氏の転出と木山克彦氏の助教採用	
シカゴ大学に滞在して by 野町素己	4
4th East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies に	
参加しての所感 by 本田晃子	8
学界短信	11
学会カレンダー	
図書室だより	12
『中国少数民族旧期刊行集成』の購入／『農業と林業 Сельское хозяйство и лесоводство』の購入／サハリンの古地図画像の公開	
編集室便り	13
スラヴ研究／Acta Slavica Iaponica	
会議	14
センター協議員会	
みせらねあ	14
人物往来／研究員消息	

2012 年 11 月 7 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	家田修
発行者	宇山智彦
発行所	北海道大学スラヴ研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
